

『いはでしのぶ』論

—〈喪失〉を中心に—

大倉 比呂志

はじめに

『いはでしのぶ』は二〇年程前に三田村雅子⁽¹⁾によって画期的な論が発表された後、最近では天皇家中心の物語であり、巻一冒頭部から語り出される「桜」が皇統譜の喩であると論じられているように、いわば皇権論の立場からの発言が目立っている。そのような視点に立脚すれば、故一条院―白河院―嵯峨院―今上帝と四代にわたる世代が語られており、故一条院の実子である内大臣(養父は関白太政大臣、後の入道関白)と白河院皇女の女二宮(一品宮、後の女院)との間に生まれた若君が今上帝となるわけだから、白河院とその子の嵯峨院へと継承された皇統譜を故一条院側が奪回する物語とも考えられるが、小稿では別の観点から『いはでしのぶ』に大きく関与すると思われる〈喪失〉の問題を中心に論じていきたいと思う。

一

内大臣に降嫁した白河帝(後の白河院)の皇女一品宮は内裏から内大臣

の住居である一条院に移居したわけだが、巻一冒頭は、

ゆふべの雨も吹く春風も、なほみる人からにわきける心の色にや、外の木ずゑよりは匂ひことなる花のにしきも、ただをちこちにかひなき御ながめにて、雲井になれし春の恋しさ、南殿の桜のさかりには、かならずうへの御つぼねにてみせさせ給ひしものを、などおもほしつづくるに、かへらぬいにしへのみしのばしく、つねより殊に物かなしき折しも、かよふ御心にやあらむ、二位中将その花の枝をもて参り給ひつつ、……(1・二三五)⁽⁴⁾

と起筆されている。これは一品宮が降嫁前まで暮らしていた内裏を懐しんでいる様子が連綿と記されており、いわば一品宮の内裏生活の〈喪失〉による悲哀が語られている。このように『いはでしのぶ』の冒頭が〈喪失〉で語り始められていることに注意しておきたい。というのは、一品宮のもとに届けられた兄弟である春宮(後の嵯峨帝、嵯峨院)の手紙に、

「このへの匂ひはかひもなかりけり雲井の桜君がみぬまはむかしの春は恋しうこそ」と。(1・二三八)

とあり、傍線部に表象されているように、春宮もまた一品宮の内裏不在の

悲哀を味わっていると語られているからだ。その春宮への一品宮の返歌「ながらへん心ちこそせねふたばよりなれし雲井の花にわかれて」(1・一四一)にも傍線部のごとく、内裏生活の〈喪失〉による悲哀が詠み込まれている。このように冒頭部から〈喪失〉が語り始められており、それがこの作品の主要な素材となっている点は看過すべきではなからう。

その後、この作品における男主人公格である内大臣と関白(それ以前は二位中将など)の人物紹介がなされているわけだが、内大臣の実父である一条院が関白太政大臣に自分が死去したならば、女御である三条内大臣女を北の方とし、その女御から生まれてくる子を実子として育ててほしいという遺言を残して、崩御する。とすれば、内大臣は実父が〈喪失〉した後に誕生することになる。その内大臣は、白河帝の鍾愛する一品宮を恋慕して、

こぞの秋ごろ、あさましきゆめのかよひち、つゆにぬれさせ給ひしそのままに、(一品宮へ) おきもあがらせたまはず。(1・一五三)

とあるように、一品宮のもとに闖入し、白河帝の関知しない状況のもとで、一品宮を犯したのであり、これは白河帝にとっては娘の〈喪失〉を意味するわけだが、最終的にはやむをえず内大臣への降嫁を決定する。

一方、関白の父右大臣は兄弟である関白太政大臣が長男で、右大臣は三男であったが、年齢が若いのもかかわらず、彼らの父である入道大殿が関白職を譲ろうとした程の逸物であったと語られている。その右大臣が白河帝と貞観殿女御との間に生まれた「いよいよ匂ひみち、たぐひなくおはしま」(1・一六〇)す女一宮を白河帝の関知しない間に盗み出したために、白河帝はこの事件を黙認せざるをえなかったわけだが、それは前述の内大

臣の場合と同様に、白河帝にとっては娘の〈喪失〉を意味しよう。その女一宮は出産直後に死去し、翌年に右大臣も死去したのである。このように関白は誕生後間もなく両親が死去したわけだから、〈喪失〉という状況のもとで成長していったのである。

二

兄の関白太政大臣が一条院の遺言で一条院女御と結婚したために、弟の右大臣もそれへの対抗意識として白河帝女一宮を盗み出したとも考えられるもの、前述したごとく、『いはでしのぶ』は巻一冒頭から〈喪失〉の色彩が濃厚なのである。これを『いはでしのぶ』の独自性として簡単に考えてしまってもいいのだろうか。例えば、『和泉式部日記』冒頭は愛人為尊親王の死により「夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮ら」⁽⁵⁾している「女」の様子から語り出されているのであって、いわば〈喪失〉で始まっているといっても過言ではなからう。また、『源氏物語』桐壺巻冒頭も桐壺帝が寵愛した桐壺更衣が後宮世界における他の后たちとの軋轢のために、光源氏が三歳の時に死去したわけであるから、〈喪失〉というイメージが濃厚につきまとうているのである。

このように、『いはでしのぶ』の冒頭は『和泉式部日記』や『源氏物語』桐壺巻のその影響を受けながら、死という〈喪失〉を中心に語り始められている。また、関白は「れいの人しれぬ心さわぎけしからぬまでに成りぬれど」(1・一三五)、「あさかのぬまは、かつ見るからにもまさる御心の内ぞ、いみじうくるしかりける」(1・一五六)などと、内大臣の北の方である一品宮に対する「いはでしのぶの恋」が随所で語られており、狭衣大

將の源氏宮に対するそれが『狭衣物語』で語られているのと軌を一にする。もちろん、独身女性と人妻に対する「いはでしのぶの恋」という差異はあるものの、『狭衣物語』の影響をも考えておくべきだろう。⁽⁷⁾

さらに、冒頭が〈喪失〉から語り始められている作品である『浅茅が露』との関連は等閑にはできず、特に〈喪失尽くし〉で作品全体が彩られている『浅茅が露』の存在を軽視できないのではなからうか。⁽⁸⁾ ちなみに、文永八(一二七二)年に成立した『風葉集』に『いはでしのぶ』は三十三首(その他に詞書に一首記されているために、三十四首となる)、『浅茅が露』は十首採られているものの、十三世紀初頭頃に成立したとされる『無名草子』には両者に関する記事がなく、両者の成立の前後関係を明確にはできないわけだが、『いはでしのぶ』と『浅茅が露』との同時代性並びに近似性については注目しておかねばなるまい。

ところで、『浅茅が露』の冒頭において帝の寵愛する大納言典侍が源中將に盗まれたことが語られた後、「世の人、月日の光と思ひきこえた」⁽¹¹⁾る二位中将(関白の息子で、後に中納言)と右大臣を父とする三位中将はどのように語られているのだろうか。二位中将は幼なじみの姫宮(父・帝、母―大納言典侍)に想いを抱いたために、父関白は帝と中宮に結婚の許可を求め、帝が退位したので齋宮も交代することになり、先坊の姫宮がその職に就くことが予定されていたにもかかわらず、母御息所の急死により、姫宮が急遽齋宮に立つこととなった。二位中将は失意のために、先坊の姫宮に通い出したが、夜離れがちであり、それが原因で病気となった先坊の姫宮に対して叔父の律師が加持をするものの、邪心を抱き、先坊の姫宮を犯したことが二位中将の知るところとなり、その結果、先坊の姫宮は死去することになる。とすれば、二位中将は姫宮と先坊の姫宮の二人を

〈喪失〉したことになる。一方、三位中将の母は帥宮の娘だが、母と叔父の源中將は行方不明となり、いわば三位中将を取り巻く近親者の〈喪失〉した状況が語られている。さらに、源中將を父、大納言典侍を母とする姫君は、父の失踪、母の死去という両親の〈喪失〉した状況の中で成長する。二位中将が方違えのために兵衛大夫宅に赴いたところ、姫宮(後の齋宮)に似た前述の姫君を発見し、一度の契りを結ぶわけだが、その後姫君の乳母が亡くなり、それを機に乳母の夫である兵衛大夫が姫君に言い寄ったために、太奏参籠の最終日に乳母子式部とともに西の京に失踪した。その後偶然にも三位中将に援助されて、二位中将との間の子を出産するが、やがて姫君は死去する。ところで、三位中将が北山の聖を訪れた折、持仏堂で見た女が、実はかつて出産の手助けをした姫君に酷似していたので驚いて北山の聖に尋ねたところ、聖の師である書写山の聖(姫君の父で、もとの源中將)の夢告により、蓮台野で姫君を発見し、加持により蘇生させたとのことであった。そこで姫君は生き返ったわけだが、その姫君は『風葉集』によれば、「浅茅が露の尚侍」(巻5・秋下・二九八)、「尚侍」(巻12・恋一・八八五)と記されているように、後に尚侍になったのである。結婚していても尚侍に就任する例もあり、二位中将と結婚した可能性が考えられなくはないものの、『風葉集』(巻14・恋四・一〇二二)に、⁽¹²⁾

尚侍、心にもあらず内に参り侍りけるころ、「頼みしことぞ

悲しき呉竹の」と書きて侍りけるを見て

玉藻に遊ぶ関白

呉竹のよよに絶えじと思ひしをいかでむなしき仲となりけん⁽¹³⁾

とあり、この歌は二人の仲は絶えることはないと思っていたのに、どうして離れなければならぬ状況になってしまったのかという意味である。さ

らに『風葉集』(巻6・冬・四二九)に、

内侍のかみさま変へて侍りける後、雪の朝に遣はさせ給ひける

玉藻に遊ぶの朱雀院御歌

あはれとは思ひおこせよ片敷きて身もさえわたる雪の夜な夜な

とあり、尚侍が出家したことが理解されるわけだが、その尚侍は帝時代の朱雀院と関白との三角関係にあって、「進退きわまつた尚侍が、宮中を抜け出て出家した⁽¹⁴⁾」と考えられるところから、関白と尚侍との結婚は成立しなかったと推測される。その例から考えると、二位中将にとってこの姫君との結婚は成立せず、〈喪失〉してしまった可能性も推測できるのであり、『浅茅が露』において随所で〈喪失〉が語られているという点から、この作品は〈喪失尽くし〉の物語であるといっても差し支えなからう。とすれば前述したごとく、〈喪失〉という点で『いはでしのぶ』と大いに関連することになるのではなからうか。

三

一品宮と結婚した内大臣は、例えば「内のおとどは、年月のかさなるにそへては、かぎりなき(一品宮へ)御心ざしの、いとど匂ひをますやうに、きのふにはけふは色をそふる、見てもあかずさに」(1・二三三)とあるように、内大臣の一品宮に対する愛情が増さり、二人の間に若君(後に今上帝)と姫君(後に関白北の方)が生まれ、理想的な結婚生活を送っていると語られている。内大臣の一品宮に対する愛情の深さは、次のような記述によっても充分うかがわれる。

①うちのおとども、(伏見大君ヲ)見もておはするままに、あはれにらうたくおぼえ給へど、(一品宮ト)たちはなれては、まさりてこひしき御おもかげに、……

(2・三〇六)

②「やがてわかれに」と(一品宮ガ)の給はせし、ありしよの御おもかげはひの(内大臣ニトツテ)わすれがたさ、……(2・三九六)

③山ざとにて、「いく夜ふしみの」といひし人(伏見大君)もろともにながめしをり、(内大臣ノ伏見大君ヲ思ウ氣持チハ)あさきにはあらざりしかど、めのまへはさしおかれて、そぞろに心のみあくがれつつ、たちかへりみたてまつりしあさけの(一品宮ノ)御おもかげ、ぬれたりし御袖の色とがめでて、さまままきこえしことどもなど、かずかずに(内大臣ハ)おぼしいづるも、……

(2・三九八)

④ただいまの(一品宮ノ)御ありさまなどいかばかりならんと、めのまへにうきたつ御おもかげは、(内大臣ニトツテ)まことにみせむる心地し給へど、もてしづめつつ、……(2・四二五)

⑤(内大臣ノ一品宮ヘノ消息文)

見し秋の(一品宮ヘ)おもかげさそふあさがほのはなさへつらきあけぼのの空(3・四六九)

以上のように、内大臣は一品宮の「おもかげ」を常に想起している点からも、一品宮への愛情の深さが理解される。

ところで若君誕生後、巻二冒頭において内大臣は故一条院の第二皇子で、前春宮と兄弟である入道式部卿宮(以下、伏見入道宮と称する)を訪問するわけだが、そこで伏見入道宮から娘たちの処遇を依頼された後、伏見入道宮の病状が重くなったために、伏見大君と結婚することとなる。内大臣が伏見大君との結婚を承諾した背景には、「たぐひなき御事(注一 一品宮の

こと)にも、なにとやらんうちかよひたるこちするに」(2・二八六)、
「伏見大君ガ)かばかりをだに、まれにめづらしき事を思ふ人のさまに、
ことのほかなる人(一)一品宮)の御おもかけはひよとおぼ」(2・二八七)
したからであり、一品宮と伏見大君とが類似していたのであって、いわば
〈ゆかり〉の関係であったからである。⁽¹⁵⁾ それに対して内大臣は一品宮の耳
に伏見大君との〈うわさ〉が入り、一品宮が不快になるのではないかと思
って、一品宮に伏見大君とを告白し、さらに、白河院や一品宮の母
親である后宮が〈うわさ〉を漏れ聞くのではないかと危惧する。一品宮が
内大臣の行状に対して涙を流しているのを、嫉妬しているのではないかと
内大臣に誤解されるのを一品宮が心配しているという点から、両者の間に
は〈ズレ〉が生じているのである。

その後、一品宮は難産の末に姫君を出産するわけだが、その折に、伏見
大君の亡くなった母親が物の怪となって出現したために、内大臣は伏見大
君のもとを訪れなくなったので、故母親の姉妹である尚侍の誘いで、伏見
大君が参内したところ、嵯峨帝の目にとまって、寵愛を受けるようになる。⁽¹⁶⁾
一方、内大臣は伏見大君の失踪を知ることになるわけだが、白河院の耳
に、

「かのふしみの女君(一)伏見大君)の思ひかけずうちにまるり給へりけるほど
のありさま、うちのおとどの心ざしむいとふかくて、つやつや宮(一)一品宮)
の御ことにもおとらず、あやまりて(伏見大君ニ)すすみざまなりければ、か
くひきたがへ、くもるのよそに(伏見大君ガ)なり給へる(内大臣ノ)なげきお
ろかならんやは。(内大臣ハ)ただ一すぢに、ありし(伏見大君ノ母親ノ)御も
ののけののち、院(一)白河院・后の宮の、ないしのかみをかたはせ給ひて、
うちへまゐらせさせ給ひつるとて、女宮(一)一品宮)をも、(内大臣ハ)いまは

ことのほかうとうとしきことにおもひきこえ給ひつ、よとともにはひとり
ながめをしつつ、なみだにしづみておはすなれば、おとど(一)内大臣の養父関
白太政大臣)などもくちをしきことになんおもひなげき給ふなる」(2・三七八)

という〈うわさ〉が入る。それは白河院と后宮との主導により、内大臣と
の仲を引き裂くために伏見大君が参内させられたことから、内大臣がその
ことを恨んで一品宮との関係を疎遠にしたという内容のものであった。そ
の〈うわさ〉によって、「おぼしめしとりぬる事ひとすぢなる御心おきて」
(2・三八二)の白河院は激怒して、一品宮を白河院のもとに移居させ、伏
見大君を内大臣のもとに返すように命令し、一品宮もその〈うわさ〉に懐
悩するが、父親の誘いで結局白河院に移居する。内大臣の父関白太政大臣
は尚侍より真相を聞き、後にその〈うわさ〉がデマであったことを確認す
るわけだが(後になって、この件について白河院が父関白に謝罪している)、一
品宮が白河院に移居した後、内大臣の状況は、

⑥ ひだりもみぎも恋しさの、たえてながらふべき心地もせぬを、……

(2・三九三)

⑦ 「ただ、(一品宮トノ)いまひとたびのたいめんなくて、ゆくゑもしらずむなし
きそらにきえなば、人(一)一品宮)の御ためまで、つみおもからずしもあら
じ」など、はてはてはゆゆしげにさへ(一品宮付キノ大納言君ニ)のたまひなし
つつ、……(2・四〇六)

⑧ ゆききえてうきよにあとをとどめずはわすれやはてんなれし月日も
あらためずうき身ならば、げにながらえんこともかたかるべきを、……

(2・四二二)内大臣が白河院にいる一品宮を訪れるものの、会えずに帰る時

⑨ 内大臣殿、ありしにもあらずあをみほそり給へるしも、……(2・四二四)

⑩「かくのみもののおぼえは、いつまでかながらへんとすらん。げにこよひの月は、かのまよはんやみの思ひ出にも」とて、おしあて給へる（内大臣ノ）袖も夜のまにくちぬべきを、見給ふ人（＝関白）もそぞろにおさめあへぬ心ちし給へど、……（3・四五五―四五六）

⑪あるかなきかにいとど（内大臣ハ）おぼしくだけつつ、……（3・四六二）

と語られており、⑨に表象されているごとく、内大臣は自分の手もとから一品宮を〈喪失〉して意気消沈し、衰弱する。⑦は大納言君に一品宮と会わせるように強要し、さらに⑩⑪で語られているごとく、死を意識した内大臣の会話や心中が点綴されている。その後、一品宮は白河院移居後はじめて内大臣の贈歌に返歌し、⁽¹⁷⁾内大臣からの手紙に歌を書き添えることによって、二人の心的距離が縮まりはするものの、白河院を訪れた内大臣が辞去する際に詠んだ「さりとともまつにはかかるいのちだにあるかなきかのよひのいなづま」（3・四七七）という独詠歌には、死の予感が詠み込まれていると考えられる。この時に、内大臣の吟声を聞いて白河院は同情するわけだが、一品宮は別居している若君のことを想起して、「思ひたえたりしとし月よりも、おもかげにたちて恋しうおぼさるれど」（3・四七八）とあるごとく、一品宮にとって若君の「おもかげ」が浮かんでくるもの、出家してしまふ。この「おもかげ」という語は内大臣生存中には一品宮側から一度も語られていないという点に注意すべきだろう。

さらに一品宮の出家後、重病となった内大臣は「まきえたるみのりのかひもあらしかしたえにし人にかぎるいのちは」（3・四八五）の歌を詠み、秘密裡に一品宮が内大臣のもとを訪れた際、内大臣は「こととへよ恋もうらみもはれやらでたれゆゑならぬやみにまよはば」（3・四八八）と一品宮

思慕の辞世の歌を残して、死去するのである。このように、一品宮は俗世からの〈喪失〉を意味する出家を遂げたと同時に、内大臣は一品宮と伏見大君の二人を〈喪失〉し、最後には死という〈喪失〉の頂点に達するのである。

ところで、一品宮は内大臣の死後、

⑫入だうの宮は、あはれにはかなかりしその夜のおもかげよりうちはじめ、のたまひおきしことのさま、何とだにいはずなりにしいぶせさをとりそへ、なのめならずおぼされけれど、……（3・四九二）

⑬なくなく見あげ給ひつつきえはてたまひにしおもかげは、げにこの世のほかまでもわするべきかたなく、……（3・四九二）

⑭まきばしらよりぬし人のおもかげのさらはずはながきかた見ならまし

（4・五二八）

と語られ、三例の「おもかげ」はすべて一品宮の内大臣追慕を意味するわけだが、⑭の内大臣の一周忌の供養で詠まれた歌は、内大臣追慕を表象的に物語っているよう。

このように、内大臣は二重の〈喪失〉を経験した後、自らも現世から〈喪失〉するのである。そのような意味で、白河院の耳に入った〈うわさ〉が後になってデマであることが判明したにもかかわらず、〈うわさ〉による誤解がその後の内大臣の生き方を拘束したのであり、それが内大臣の苦悩を増殖したのであって、この作品においては〈うわさ〉⁽¹⁸⁾による誤解が内大臣の生き方を左右する重要な鍵を握っていたといえるのだ。

四

それに対して関白は、伏見大君―伏見中君―前齋院という〈ゆかり〉の女性たちと関わり、最後には内大臣と一品宮との子である姫君までも手に入れるのである。関白は内大臣の死去以前に一品宮に恋の告白をするが、受け入れられず、それが一品宮出家の原因の一つとも考えられるわけだが、関白も「なべて世のうきにも人はそむきけりなどかうき身のうきにたへたる」(4・五二七)と詠歌しているように、出家志向が皆無ではないものの、結局、〈ゆかり〉の頂点ともいうべき一品宮の姫君と結婚するのである。

また、嵯峨院は伏見大君腹の女一宮(後に今上帝の中宮)の父親を関白であると結局知ることになるが、嵯峨院は、

⑮⁽¹⁹⁾されば、我世のひかり□はあらぬぞかしと、心やましくおぼされて、

「はかなしやみかさの山にいつる日をたえ行く空のひかりかとみし

いかにをこがましくおぼえん人のおほう侍らん。いまの世はさだめてけおされたまひなんかし」とて、(伏見大君、後に嵯峨院皇后宮)うち見やりきこえさせ給ふに、……(6・六一三)

とあるように、伏見大君に皮肉を浴びせかけはするものの、白河院が〈ゆかり〉によって結果的に内大臣を死に至らしめたとき高圧的な態度をとってはおらず、白河院のそれとは対照的に語られている。その根底には、

うへ(白河院)、(関白)たぐひなくあはれなることにおもひ聞えさせ給へ

るうへ、中宮さへ、むかしの御なごりあさからず、かなしき物におもひたてまつらせて、ただ御子たちと同じ事に、ももしきのうちにておひ出で給へる。

(1・一六三)

とあるごとく、嵯峨院の両親である白河院と后宮の鍾愛の甥であったというところが、嵯峨院にとっては大きな障壁となつて、関白に対して怒りを充分に発現できなかったと考えられよう。そのような屈折した嵯峨院の怒りが伏見大君に対する皮肉となつて現象化したのが前述した⑮の引用文で物語られている。

このように、関白の人生には〈喪失〉という色彩は極めて薄く、内大臣のそれと比較して成功者というイメージが濃厚にまとわり付いているわけだが、

(「たいのうへ伏見中君」腹ノ左大将)ことのほかさきにむまれ給へれば、し

だいのままに、(前齋院腹ノ右大将ヨリ)このかみのさまなるを、ちちおとどは

あかずおぼされけり。(4・五六八)

と語られているように、関白の鍾愛する息子は右大将であったと語られている。その右大将が結婚した女四宮(白河院と帥宮女の宮の君との子)から生まれた若君が、兄の左大将と生き写しであるのを知り、左大将と女四宮との密通を疑って、「いよいよこの世は物うき数のみつもりつつ、つゆのほだしく、あきはてぬる」(7・六六一)気持ちを抱くようになる。これが右大将の出家の決定的な理由ではないものの、父関白の北の方である一品宮腹の姫君を恋慕し、それが受け入れられなかったということと相俟って、例えば「なに事につけても、なべてこの世もにごりにしみ、ありはて

ばやおもふことはなけれど」(7・六四一)とあるごとく、右大将は以前から厭世感を抱き、苦悩した結果、「うちかたらひ給ひつつ、御馬どもにめして、吉野の山をさして入り給ひぬるぞ、あはれなることにこそ、そのころは聞き侍りけめ」(8・七一四)と擱筆されているように、関白家の後継者と考えられていた右大将は出家し、現世から〈喪失〉したのである。

とすれば、右大将の出家は関白に大きな衝撃を与えたはずであるが、それに対する関白の内面が一切語られていないのはどうしてなのか。一品宮姫君所生の若君の二位中将という官位は昔の父関白と同じものであり、それは関白の後継者の表象を意味するのであって、関白家の後継者が右大将から二位中将へと移行したと横溝博が述べているように、右大将は前述したことも含めて種種の苦悩によって出家したと考えられる。将来的に二位中将と競合する可能性のある右大将が〈喪失〉した方が、関白家にとっては安泰なのではなからうか。そのような意味において、本物語は紆余曲折しながらも、究極的に関白家の安泰と勝利とが語られていると考えられる。だからこそ、右大将の出家をめぐる関白の内面は一切語られなかったのだ。それゆえに、中納言⁽²¹⁾と共に吉野で出家を遂げたという一文には重い意味が内包されている。⁽²²⁾

おわりに

この物語は〈喪失〉という点において首尾照応し、〈喪失尽くし〉が内大臣を中心にちりばめられて語られており、特に『浅茅が露』における二位中将の二人の姫宮の〈喪失〉の重層性が内大臣の一品宮と伏見大君のそれと関連するのではなからうか。現在のところ、両作品の成立年時を確定

することは困難であり、〈喪失〉の内容の次元では両作品において異なっているものの、『浅茅が露』と『いはでしのぶ』における〈喪失尽くし〉の問題を、前述したごとく、同時代性という枠組みの中で考えていくべきではなからうか。

注(1) 三田村雅子「いはでしのぶ物語」『体系物語文学史』第四巻 有精堂 一九八九・1

(2) 助川幸逸郎「恋路ゆかしき大将」における〈王権物語崩し〉—「いはでしのぶ」との差異が物語るもの—(国文学研究 第一三六集 二〇〇二・3)

(3) 横溝博「いはでしのぶ物語」の表現機構—皇統譜の喩としての桜—(早稲田大学大学院文学研究科紀要 第四五輯第三分冊 二〇〇〇・2)、「いはでしのぶ物語」開巻部の表現機構—一条院の桜・南殿の桜をめぐる—(源氏物語と王朝世界 武蔵野書院 二〇〇〇・3)

(4) 本文は小木喬「いはでしのぶ物語 本文と研究」(笠間書院 一九七七・4)により、一部私に表記を改めた箇所がある。なお、算用数字は巻、漢数字は該当ページ数を示す。

(5) 『和泉式部日記』の本文は新編日本古典文学全集による。

(6) 関白の子である右大将(前斎院腹)も、内大臣と一品宮との間に生まれ、後に関白北の方となった姫君を恋慕しており、親子ともども人妻を恋慕している。さらに『狭衣物語』と同様、関白も右大将も各々恋慕している相手に告白し、受け入れられないという共通点がある。

(7) 三谷栄一「物語文学史論」有精堂 一九六五・10)は、『狭衣物語』の冒頭と『いはでしのぶ』のそれが、山吹の花に藤の花を添えて狭衣大将が源氏宮の所に持って行くのと、関白が内裏の桜の花を一条院に持っ

て行くのと同じ趣向であると指摘している。

- (8) 〈喪失〉に関しては、大倉『あさぢが露』論—〈喪失尽くし〉の物語—
〔平安朝文学研究 復刊第七号 一九九八・11〕で触れたことがある。

- (9) 樋口芳麻呂は『無名草子』の成立時期〔平安・鎌倉時代散逸物語の研究〕ひたく書房 一九八二・2)において、『無名草子』の成立を正治二年(二二〇〇)七、八月以後、建仁元年(二二〇一)十一月以前と考えている。

- (10) 辻本裕成は「同時代文学の中の」とはすがたり」〔国語国文 一九八九・1〕において、『とはすがたり』と擬古物語群との同時代的関係について論じている。

- (11) 『浅茅が露』の本文は中世王朝物語全集〔笠間書院〕による。

- (12) 後藤祥子「尚侍放—朧月夜と玉鬘」〔源氏物語の史的空間〕東京大学出版会 一九八六・2)によれば、尚侍は「皇妃的であって皇妃ではなく、史実として「未亡人で尚侍になった者は夫に多」く、「大臣の寡婦の尚侍就任」はよく見られるが、藤原兼通女婉子は夫の参議源信との結婚後、夫の死去するまで尚侍であったし、『源氏物語』においても、鬘黒大将と結婚した玉鬘が尚侍となった例が語られている点からも、結婚後に尚侍になった例もある。

- (13) 『風葉集』の本文は岩波文庫『王朝物語秀歌選』による。

- (14) 神野藤昭夫「散逸物語『玉藻に遊ぶ権大納言』の復原」〔散逸した物語世界と物語史〕若草書房 一九九八・2)

- (15) 〈ゆかり〉に関して最近のものとしては、勝亦志織「いはでしのぶ」の前斎院考」〔学習院大学大学院日本語日本文学 第二号 二〇〇六・3〕がある。

- (16) 伊井春樹「いはでしのぶ物語構想論—伏見宮の姫君たちの運命をめぐる—」〔源氏物語論考〕風間書房 一九八一・6)は、伏見大君に『し

のびね』の女主人公の影響が認められると指摘している。

- (17) 小木は注(4)前掲書【考】において、「昨年十月以来、一筆の御返事もされなかった女宮(注—一品宮)が、ここで初めて返歌をしたためられたということは、大きな変化であって、それは、おそらく御出家の決意をされたことに由来するものと考えて誤りはないであろう」と指摘している。

- (18) 〈うわさ〉が物語の展開上重要な鍵を握る作品として『白露』をあげることができよう。大倉『白露』論〔学苑 二〇〇〇・9)を参照されたい。

- (19) 小木(注(4)前掲書)は□の個所は虫食いだ、に」であろうと推測している。なお、『鎌倉時代物語集成』第二卷〔笠間書院 一九八九・7)所収の抜書本『いはでしのぶ』も「に」としている。

- (20) 横溝博「いはでしのぶ」右大将の「あはれなる事について—二位中将への告別の場面をめぐる—」〔平安文学の風貌〕武蔵野書院 二〇〇三・3)、「中世王朝物語の通過儀礼」〔王朝文学と通過儀礼〕竹林舎 二〇〇七・11)など。

- (21) この「中納言」は系譜が不明な人物だが、三田村(注(1)前掲論文)は関白太政大臣を長男とする三兄弟の二番目である左大臣の孫であろうと推測し、『中世王朝物語・御伽草子事典』(勉誠出版 二〇〇二・5)所収の『いはでしのぶ』(足立蘭子執筆)も同様に考えている。

- (22) 注(21)で触れたごとく、右大将とともに出家した中納言が三田村の推定通りかつての三兄弟の次男と考えられる左大臣の孫だとすれば、二位中将を脅やかすような邪魔者はいなくなり、関白家の安泰をより一層強調することになる。関白のことばの不在は、安堵感を表象しているのかもしれない。

(おおくら ひろし 日本語日本文学科)